



有馬 經行

中村俊定

全

中村俊定文庫  
文庫 18  
548



裏打製本原寸保持

昭和十年五月三日 水口豊次郎

中村俊定文庫



かゝる海軍の発展は... 船の改良... 造船の技術... 造船の設備... 造船の材料... 造船の労働... 造船の管理... 造船の監督... 造船の検査... 造船の記録... 造船の報告... 造船の計画... 造船の設計... 造船の施工... 造船の完了... 造船の引渡... 造船の保守... 造船の修理... 造船の更新... 造船の廃棄...

しそかみかきくくくくくく

いふふふふふふふふふふふ

嘯山

んんんんんんんんんんんん

わんわんわんわんわんわんわん

土髪

七首の船宿を雨具やの物裾をかきかきかきかきかきかきかき

汁はばきききききききききききききききききききききき

んんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんん

伏見 來始

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

なななななななななななななななななななななななな

波瀾たけなななななななななななななななななななななな

中ねたけなななななななななななななななななななななな

うねり目もももももももももももももももももももももももも

よりるは戸裾はははははははははははははははははははははははは

かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

ぬるぬるのきききききききききききききききききききききき

子孫らららや 浦巻とやいふふふふふふ

井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井井



わきまをうけしるるのききあつりや

嶺山

ねがふにうらを海うらうら

福原 沙月

ゆれはるるは白くはるるはみも満ちるるのあり

そのまじとあはれくはるるのまじとあはれくはるるのまじ

まじとあはれくはるるのまじとあはれくはるるのまじ

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

六馬

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

聞居

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

數畝

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

一貫

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

湖

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

方居

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

它谷

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

小白

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

嶺山

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

なまはるるのまじとあはれくはるるのまじ

はるかにあそびてくるとはなれぬとて

一とわたりて海をくぐりてし喜ぶ一

月はあまのすめくしとておのれをいふ

約々たるおのれをいふ

奇宗、きよき 遊ま 夕月

鐘をぬきておのれをいふ

底も二階もふたもいふ

玉響のおのれをいふ

音もいふ

大石

士川

嘯山

沙月

一貫

桃葉

敷砂

脇濱

コ麦

はるかにあそびてくるとはなれぬとて

ふたも二階もふたもいふ

鐘をぬきておのれをいふ

底も二階もふたもいふ

玉響のおのれをいふ

音もいふ

月と友二階とあそびてくるとはなれぬとて

美しきおのれをいふ

兵庫

箕音

竜山

志由

旧名 多摩部

五

及、

うつりしをたもむ御心かあつひとたひし御心とてまじりて  
 ちりりん夢とてはたはたのちりりん御心とてまじりて  
 可くともわきまをいふまじりてはたはたのちりりん御心とて  
 ちりりん御心とてはたはたのちりりん御心とてまじりて  
 希くわきまをいふまじりてはたはたのちりりん御心とて  
 のちりりん御心とてはたはたのちりりん御心とてまじりて  
 朝入花熊邑追小徑深溪流時左右雲靄或晴陰六  
 甲清秋氣再山琪樹共遙聞逝川畔夏水音。

甲清秋氣再山琪樹共遙聞逝川畔夏水音。

とすてゆくやの 穠のやとくしに 押するふやとくすくはや 湯樽と并り  
浄くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
そと色 諸如と 夢にまふし したはれらるるけり かりけりすし せぬしり せと  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
たるんは 凡俗のさへ 一も違ふ せやるるけりすし せぬしり せと  
その平かなと けりく せりく せりく せりく せりく せりく せりく せりく せりく

如月の潮音す なるもなきなり

客舎主人

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

治水

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

しむい 玉の珠 守りし 望み 願ひ あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

くくく 固らね 侍二 年侍 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

舊識禪師明教 儔 遥登馬嶺 遇 清秋 偏慙六十 歎居士

來往 風烟 空白頭

馬溪 禪室 傍 巖阿門 外 清流 秋草 多 落葉 山頭 寒霧 盡

來宵 明月 更 如何

一夜 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

去年 撰西 泛 輕舟 二五 宵 漢宿 霧愁 蘆花 蕭々 海上 雨

連 峯 空濛 晚未 收 桂櫂 迂移 九島 院 蘭洲 光禪 素寛 柔



飲酒既容陶入社揮毫不訶謝登樓雲暗檻外豈指月  
壺傾燈前空數籌木犀之風撲鼻馥正入審處尚踟躕  
今歲八月馬山北善福精舍遇中秋默堂上人舊相識  
為供香飯勞遠游聞是西天黃金佛長留東土蜻蜒洲  
屢脫災火應慈觀幸當佳期共唱酬落葉山上一輪滿  
山下清川逐光流西風浙瀝樹間響昔人城壘還存不  
吊古騷客互代謝今來迤邐有明月留兩地江山陰晴異  
明主何處照白頭

...

...

...

...

偶携元亮倚香城下界蒼茫度笛聲坐慕南樓吟嘯起  
忽窺東嶺月輪生去年梧葉空聞雨今夜松烟轉弄晴  
為是羅門迎逸客金風一段桂華清

默堂

...

香刹園林豈化城。客來深省暮鐘聲。親知玩世欽文道。  
何用非才慙許生。天外月高銀漢隱。山中氣爽碧雲晴。  
還疑桂子檐間落。終夜頻令凡骨清。

嘯山

世上風騷士。唯期今夜晴。新昇一輪彩。同送萬峯明。澗  
水魚兒躍。楓林麋鹿鳴。不斟般若賜。敢得吐真情。全

一水如和々

自古多風雨。忻君值此晴。雲磨銀漢盡。月與彩毫明。啜  
茗疎廉捲。吟詩玉籟鳴。今宵真逸趣。相得景兼情。默坐

玉函又去年のふとさのせりり

玄冬唱。別王京陰。蜀魄梅花夢裡深。今夜迎君一輪滿。

秋光聊似野僧心。

約々々々

天將風雪浴城陰。一夜留師別恨深。忽遇今秋三五節。

馬山明月照鄉心。

地州城をりて流るる水は山に映りて山如月と見え  
ほらほほ心も清くさるるをりて流るる水は山に映りて  
地州城をりて流るる水は山に映りて山如月と見え  
ほらほほ心も清くさるるをりて流るる水は山に映りて  
地州城をりて流るる水は山に映りて山如月と見え  
ほらほほ心も清くさるるをりて流るる水は山に映りて

うきうきと遊ばせし中なる御座りしに申すははるかに  
しるしのいふ遊ばせし御座りしに申すははるかに  
船のうきうきと遊ばせし御座りしに申すははるかに  
船のうきうきと遊ばせし御座りしに申すははるかに

何れに遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

有馬  
京馬

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

遊ばせし御座りしに申すははるかに

有馬  
京馬  
嘯山  
馬人

京馬  
嘯山

秋の風  
日輪をぬき  
下りおほく  
吾座より三千の

葉を看する  
何れもなき  
後生ともな  
未

京 未人  
全 李源  
朝三

未  
朝三

...

杜仙

公

嘯山

...

...

...

馬嶺重の窄碧天。溪渡鹽氣湧。温泉萬千人浴湯常滿す

二十坊分檻正連。久祭神祇新廟宇。幾巡鸞駕舊山川。  
月昇樓上絃歌發。醉裏聞來誰不憐。

溫泉決々送凝脂。南北之槽溢作漪。萬古靈源元不測。  
終年春色未曾移。誰家病客晞黃髮。何處佳人下錦帷。  
更有送迎湯女在燈前。唱和馬山詞。

ちよびてしり宙にありまき

潮泉深谷裡。終古沸如湯。多少來遊客。誰能試朔望。

曾聞大化古。霓旌翻錦繡。風烟十餘年。不復望巡狩。

少生二田邑。曉天秋色濃。半空籠行霧。憑竹小芙蓉。

うさへぬささるるはなはな

昂然羽衣齡超千載。漢武秦皇。敢得乘北背。

卯白世に遊の何うし及びのんけいのくまのり。耳のちてめ  
ちよびてしり宙にありまき  
わたりてしり宙にありまき  
わたりてしり宙にありまき  
わたりてしり宙にありまき  
わたりてしり宙にありまき  
わたりてしり宙にありまき

歌樂樓前臨水灣。泉奔龜尾斷崖間。蒼々竹樹秋風起。  
青上欄干羽束山。

福原中の人より信じてる酒は有るわ  
ちよびてしり宙にありまき

使ふ有るハ家書下りやありありと月影とてわたりておとそ

あつたけしつゆのやまよき月

けいせん けいせん けいせん

ふたりのまよとまよと 悟るまよ

湯よりふんやわし 秋久月

おきりの旅もよそり小竹のまよとまよとてまよとまよとてまよと

わたりてまよとまよと川原のまよとまよとてまよとまよとてまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

送故迎新態娟々 歌動春前川無照影一笑恐驚人

と田丹生の山苗折れしとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

そよよとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

曉を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり  
昔も鳥のやよよのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり  
ふんふんふんふんふんふん

元の二羽にわかれ鳥やんま

幼るしゆらるる花ののびるをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり  
昔も鳥のやよよのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

秋の夜もやんま

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり  
昔も鳥のやよよのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

昔も鳥のやよよのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

とぬるやんまのなきをたぐり秋の暮れ時を告ぐる鳥のやよよのなきをたぐり

しそ右の... 中... 山... 遊... 寄

汗身一二布... 水... 寄

蘭州... 又... 寄

方... 寄

難波 半隱

馬山留滯日。乃浴温泉時。多暇烟霞勝。同遊又誰。

山

妖... 寄

寄

聞嘯山翁遊... 山遙有... 寄

聞君患臂問。温泉右馬繁華也。可憐想像浴來。接上臥。

烟霞痼疾定。俱痊。

枝栖

日浴温泉臂轉輕。烟霞痼疾幾時平。層樓座望芙蓉黛。

虛壁行聽鼓瀑聲。

赤羽

...







川と心なまけくもみらふ

全

贊郷

海へはすくやなれくはま山

京婦

幾

くちあふまきくはまの秋の夕暮し  
くちあふまきくはまの秋の夕暮し  
くちあふまきくはまの秋の夕暮し  
くちあふまきくはまの秋の夕暮し

又角力樹のくちあふまき

贊郷

土角力樹のくちあふまき

嘯山

月色川流るりよの宵もれ書かやも  
月色川流るりよの宵もれ書かやも  
月色川流るりよの宵もれ書かやも  
月色川流るりよの宵もれ書かやも

荷若中秋明月。座間但覺風。前川通夜。清影偏使。

光賢腸

我離馬嶺空顧。師在京城未歸。落葉山頭秋色高。遠

照客衣。

まのくちあふまきくはまの秋の夕暮し

まのくちあふまきくはまの秋の夕暮し

まのくちあふまきくはまの秋の夕暮し

京馬

川流るりよの宵もれ書かやも

深し庭中一林の石上社の人と云ふは伊弉諾  
 と云ふ神功多石の権と云ふもくを云ふと云ふは伊弉  
 以上にはあまも物具と云ふ伊弉諾にすくは甲中さくは  
 無唐凌臥唐浦と云ふは伊弉の御心をやうの事と権  
 知らうと兼山上の御心と云ふ同く事なりと云ふ  
 事も云ふともおはるる事と云ふ事仲良の事か  
 此上は伊弉の事と云ふは伊弉の御心をやうの事と  
 事と云ふ事と云ふは伊弉の御心をやうの事と云ふ事  
 と云ふ事と云ふは伊弉の御心をやうの事と云ふ事  
 事  
 事

事や伊弉の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

事や事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

再山秋色氣峰嶭。織月斜陽相映。暗無限海風吹不止。

紫瀾擊出浪華城。

申の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

國のまゝにふりまわすも白ひり

鉄拐

すまゝに竹のたきみよ

賛郷

清く孫のまゝおわする角力

它谷

兵隊はくつを履きながら  
陣とあはれ

多難回天力。長川落大星。牝雞鳴紫闥。鳳輦下青眞。鞞  
畧功空廢。忠良名獨馨。碑前霜露冷。誰不肅英靈。

中國の生かすはくつを履きながら  
はくつを履きながら

布引

布引のふりまわすも白ひり  
すまゝに竹のたきみよ  
清く孫のまゝおわする角力  
兵隊はくつを履きながら  
陣とあはれ  
多難回天力。長川落大星。牝雞鳴紫闥。鳳輦下青眞。鞞  
畧功空廢。忠良名獨馨。碑前霜露冷。誰不肅英靈。  
中國の生かすはくつを履きながら  
はくつを履きながら  
布引のふりまわすも白ひり  
すまゝに竹のたきみよ  
清く孫のまゝおわする角力  
兵隊はくつを履きながら  
陣とあはれ  
多難回天力。長川落大星。牝雞鳴紫闥。鳳輦下青眞。鞞  
畧功空廢。忠良名獨馨。碑前霜露冷。誰不肅英靈。  
中國の生かすはくつを履きながら  
はくつを履きながら

うねのちあつしつに流るる傍示あり

うねのちあつしつに流るる傍示あり

おの流るる水はいつとてけいせいのあまのくまの人の心をい

とをらんかゝりにいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

まのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

長夏飛流空谷喧懸崖但見水烟昏莫令狂客窺潭底

恐有奔雷震水門

あまのくまの人の心をいせしけいせいのあまのくまの人の心をい

春ら午鳥取の流とおとろ

嘯山

あつらふぬし掬を折る折

熊内 榮瀧

舟の流津遊の位年よ遊りけく

全 支鳩

奥を居となく折あき

賛涓

下畧 家おもふなり 御来く 神くは さらけ あり せし 健みえ ころね

いと 大に たそ へし 照と づを 寝寝 寝 寝 寝 寝 寝 寝 寝 寝

ぬしと けり 係 乃 々 入 あり せ 書 保 ち せ 保 ち せ 保 ち せ 保 ち せ

の 申 ぞ ぐ ぐ ぐ ぐ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

大 ぬ

昔の折る 折る けく じわき ちゆ

好風や 二十 折る けく ぬ 東 一 貫

けわしの 葉 けし ぬ の 流 けく ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

さき ぬ の お けり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

千 ぬ の ぬ

流 ぬ

七日 味 爽 ぬ

ぬ ぬ

さき ぬ

賛郷

敬啟下すも弱冠の二時、凡將よ志保りを健康おめめく  
やよこの暇もあし来りて郷よこころをこころとて昔居る白とてし  
物もよおしけりてりし忠和の跡

まふよの想ふ知言同お成りてこころをこころとて計ありて午時  
のち西ましるをこころとてしけりてりし忠和の跡より申す物  
よよりまふ想ふお成りてりし忠和の跡より申す物  
の原志と謝しす物とてりし忠和の跡より申す物  
よよりまふ想ふお成りてりし忠和の跡より申す物  
よよりまふ想ふお成りてりし忠和の跡より申す物

いふれいこゝとて連く春精思ふに海よあつて故のちらひあつりけ  
こころの程いふとてりし忠和の跡より申す物

ちねのこころよあつてりし忠和の跡より申す物

方宜しりし華海お成りてりし忠和の跡より申す物  
こころの程いふとてりし忠和の跡より申す物  
よよりまふ想ふお成りてりし忠和の跡より申す物

有きふほれはく系さうあつてりし忠和の跡より申す物

孫うほれはく系さうあつてりし忠和の跡より申す物

法月よあつてりし忠和の跡より申す物

半隠  
嘯山  
枝栖



ゆくゆくはのしほれいふは

方空

珍珍き情の極向拭かれ

賛郷

系第 野見 鼻れおころ

枝栖

ほろゆわふり 下男 女中川で博くふおこれ 此 沙夷泊 五 け

をも 風家 お あり 健 お あり なるの上 お あり お あり お あり お あり

も あり あり 博 あり あり 住 あり あり お あり お あり お あり

くる 海面 あり お あり お あり お あり お あり お あり

し お あり お あり お あり お あり お あり お あり

と お あり お あり お あり お あり お あり お あり

さ お あり お あり お あり お あり お あり お あり

くら お あり お あり お あり お あり お あり お あり

沙夷泊のほのこし

方空

を お あり お あり お あり お あり お あり お あり

賛郷

三美路 お あり お あり お あり お あり お あり お あり

嘯山

一揮 お あり お あり お あり お あり お あり お あり

筆 お あり お あり お あり お あり お あり お あり

京之房

ふり お あり お あり お あり お あり お あり お あり

ゆ お あり お あり お あり お あり お あり お あり

送別吟

各はしきを異す

家ちを察ふらん 菜色 古馬山  
澁の酒らんく 望らん 故ノ哥  
さしし 杖の軽きと 杖の草  
ゆき 杖のく 酒をの 杖の草  
さしし 杖の軽きと 杖の草  
さしし 杖の軽きと 杖の草

孤洞  
可幸  
季遊  
未人  
允孫  
南雅

東圃  
東窓  
疑山  
省我  
既醉  
松賀  
岐山  
井と  
不存

東圃  
東窓  
疑山  
省我  
既醉  
松賀  
岐山  
井と  
不存

旅中ありあり並つれど  
こゝろははれははれは  
あはれははれははれは  
ゆりともはれははれは

委水  
蘭郷  
子龍  
文誰

澤菴を祝しある鞆中と早の白くも

はれははれははれは  
心のあはれははれは  
あはれははれははれは

大夢  
稻音  
松島

詩ははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは  
あはれははれははれは

其樂  
仙宇  
吟阿  
如松  
旭扇  
玉壺  
魯雲  
周雅  
子一

確を回るとありーさるお秋

河の利の急りー流持りんら指

兼<sup>兼</sup>流<sup>流</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>

ゆ<sup>ゆ</sup>ね<sup>ね</sup>な<sup>な</sup>所<sup>所</sup>の<sup>の</sup>白<sup>白</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>酒

か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>兼<sup>兼</sup>お<sup>お</sup>花

年<sup>年</sup>持<sup>持</sup>と<sup>と</sup>流<sup>流</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>こ<sup>こ</sup>も

湯<sup>湯</sup>の<sup>の</sup>合<sup>合</sup>ー<sup>ー</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>流<sup>流</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>白

ふ<sup>ふ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>好<sup>好</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ー<sup>ー</sup>何<sup>何</sup>は<sup>は</sup>流<sup>流</sup>重

ゆ<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>ず<sup>ず</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>さ<sup>さ</sup>を<sup>を</sup>兼<sup>兼</sup>

九々

花眼

何石

枝芽

文湖

都川

貢舟

遣鷗

子江

さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>酒

湯<sup>湯</sup>の<sup>の</sup>利<sup>利</sup>の<sup>の</sup>急<sup>急</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>流<sup>流</sup>重

ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>身<sup>身</sup>子<sup>子</sup>入<sup>入</sup>す<sup>す</sup>ー<sup>ー</sup>湯<sup>湯</sup>の<sup>の</sup>利

湯<sup>湯</sup>の<sup>の</sup>利<sup>利</sup>の<sup>の</sup>急<sup>急</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>流<sup>流</sup>重

ゆ<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>ず<sup>ず</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>さ<sup>さ</sup>を<sup>を</sup>兼<sup>兼</sup>

ゆ<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>ず<sup>ず</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>さ<sup>さ</sup>を<sup>を</sup>兼<sup>兼</sup>

湯<sup>湯</sup>の<sup>の</sup>利<sup>利</sup>の<sup>の</sup>急<sup>急</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>流<sup>流</sup>重



和<sup>和</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ー<sup>ー</sup>梓<sup>梓</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

深志

雷序

青畷

<sup>在江戸</sup>青蒲

普州

杜支

賈友

サカ

雲臥

そのよふあはに海くはくしむるもの  
昔くもたはくしむるもの  
温泉の湯もまじはるはくしむ  
男しゆの湯もまじはるはくしむ  
おの湯もまじはるはくしむ  
あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 越僕

全 吳郷

全 芭由

平尾 濤山

江梅木 十蛙

十六 花芥

書通四字温報

あしゆの湯もまじはるはくしむ

越波 富田葉

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全田原 野菊

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全長尾 來祇

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全大内 一 瓢

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全清田 一 指

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 希 嘯

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 希 嘯

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 希 嘯

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 希 嘯

あしゆの湯もまじはるはくしむ

全 希 嘯

其川や橋架あはく 亭も  
 華んくし日ぬ活々 山はく  
 夕き 秋くそく 若山 富士おろし  
 柳うら 花れく 卯し 三日月  
 下りけ 舟く 仙くお 秋も 水  
 航のあく 三日月 同守 三輪 一 家  
 空 燈もて 雲く 夕く 夕く 夕く  
 福川や 古法 詠ゆわろ 男乃 是  
 花も 海く 夕く 夕く 夕く 夕く

全同 有光  
 全同 化龍  
 江膳所 六 漆  
 江馬杉 不 田  
 全婦 可 遊  
 全日者野 起 雲  
 全毛牧 歌 石  
 全石部 夫 丸  
 全譜 孤 山

同玉の 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く  
 夕く 夕く 夕く 夕く 夕く

全 龜ト  
 全 山 岸  
 全今津 社 中  
 全梅木 鷗 鳩  
 全 鬼 妹  
 伊丹 東 山  
 全熊内 士 八 遍  
 全 榮 瀧  
 全福原 設 山

富子を待たせたりとあるははるるす  
 猿とて海にれりしつゝ流るるも  
 沖をりや却て流るる 又書人  
 月をててぬ水の音ありあはれ  
 常の氣と氣のくたつき踊る  
 出れ音もさふさふきしあはれ  
宋み  
 桂のりの葉もさふさふきしあはれ  
 雲はと心もさふさふきしあはれ  
 さふさふきしあはれ

早瀬 雲魚  
 全 出  
 全 田井  
 全 河原市  
 全 一和  
 全 水音  
 全 春曙  
 義作ツ山 瀾湖  
 昔今津 里風  
 萬木

世々 々々 々々 々々 々々 々々  
 来々 々々 々々 々々 々々 々々  
二の夜  
 力いし 人れり 々の 々々 々々  
 々々 々々 々々 々々 々々 々々  
 山中や 々々 々々 々々 々々 々々  
 店々 々々 々々 々々 々々 々々  
 々々 々々 々々 々々 々々 々々  
 解乃 乃 乃 乃 乃 乃

全 科  
 全 長崎 蕉雨  
 全 大村 桃國  
 全 泰里  
 全 貞山  
 全 可登  
 全 徳  
 全 川雨

鶴つらひ下ふ心ほろく人よ立別る

貞福原 秋史

古居れまの月と山と所枯野ふ

全日 月録

月秋とてゆく寒月京よ秋のかり

全京 瓜流

艸のそはくや人よと信はる

全日 箕山

雨晴く月のそくくる津一これ

全日 楚弓

半ふれふり風や津ゆえ

全日 雅因

津亭王翁赴馬山温泉因賦此以壯厥行色云竜吟

秋風吹客鬢不落馬山巔溪畔千家合天邊六甲連

雲籠富嶽金氣涌温泉鼓瀑題詩各聲白

有感。忽然寄懷馬山善和堂今聞嘯以翁遊此。

附以奉贈祝座下。異格 内山之月

每逢人自馬山回無不言師彌我知是慈航橫苦海

枉容垢體接香臺妙經怨疾蓮莖直薄宦浮沉萍跡開

堂下温泉可大可可能浴得洗塵埃

安永八年己亥十月

平安

嘯山記

大正夕書



○ 張

張之洞



